

「お風呂空いたよー。お先にー」
江奈はお風呂から出て、まだ居間でテレビ
を観ていた妹に声をかけた。
「あ、うん。わたしもすぐ入る」
振り向いた彩菜に江奈は思いついて聞い
た。
「ねえ彩菜、覚えてる？ 小さい頃、二人で
お祭りに行ったこと」
彩菜は首を傾げて考えているようだった。
「そんなことがあったような：：」
「あの時、食べた焼きそば、おいしかったと
思わない？」
「：：覚えてないかも」
と彩菜は言った後、江奈を見た。
「なに？ お姉ちゃん、焼きそばが食べたい
の？ あ、初詣一緒に行こうか。焼きそばの
屋台も出てると思うけど」
江奈はうふふと笑って、

white season (冬) (3)

「なに言ってるの。初詣は彼と一緒に行きな
さいよ」
「あ、そっか」
彩葉は言ってから、更に言葉を続けた。
「でも、良かったらお姉ちゃんも一緒に行か
ない？」
「そうねー、ジャマしたくないから遠慮しと
く。誘ってくれてありがと」
「じゃあ、わたし、初詣二回行く。お姉ちゃ
ん、わたしと二人で行こうよ」
二度目に行くのは初詣じゃないんじやな
い？と思いつつ、こんなに自分と初詣に行き
たいと思ってくれる気持ち嬉しく思った。
「そうね。じゃあ行くこうかな」
「うん、行くこう！」
無邪気に喜ぶ妹の様子を見て、江奈も笑顔
になつた。幼い頃の思い出がよみがえり、久
しぶりに姉妹で出かけることに心がはずむ。
時に人を救うのは、心の中にある楽しかつ
た思い出なのかもしれない、と江奈は思い

「頑張る女性、ちよっぴり疲れている女性の
気が持ちからサイト開設してしまっただ。
いの場になるようなサイトを作りたと思う
たことがきっかけとなっ、自分も誰かの憩
インターネットを通して言葉たちに助けられ
まるで興味がなかったは、失恋した時は
管理人は、江奈だった。サイトを運営などには
「O^オA^アS^スI^シS^ス」というサイトを運営している
に接続した。で開き、携帯電話とつなげてインターネット
江奈は持ってきたノートパソコンを机の上
をあびてふかふかだった。のままだった。ベッドの上の布団は太陽の光
どが微妙に変わっていたが、机とベッドはそ
されていた。江奈がいた頃とは家具の位置な
元の江奈の部屋は母親によって綺麗に掃除
と言ってから、二階へ上がった。
「じゃ、部屋に行くね」
ながら、

イ ト 書 き 込 み を し て く れ た 常 連 さ ん も 自 分 の サ イ ト に
 い し ま す ！
 P し ま す ね 。 こ ち ら こ そ 来 年 も よ ろ し く お 願
 て み た か っ た ん で す 。 近 い うち に 旅 行 記 、 U
 北 海 道 、 ど ん な 感 じ か な | っ て 、 前 か ら 行 っ
 ー 北 海 道 、 よ か っ た で す | 。 ク リ ス マ ス の
 江 奈 は 早 速 、 管 理 人 と し て レ ス を し た 。
 ネ ー ム に 決 め た の だ 。
 だ っ た 。 響 き が 綺 麗 だ と 思 っ て こ の ハ ン ド ル
 a q u a と い う の は 江 奈 の ハ ン ド ル ネ ー ム
 た 。 来 年 も よ ろ し く で す ！
 ど う で し た か ？ 今 年 は お 世 話 に な り ま し
 ー a q u a さ ん 、 北 海 道 に 行 か れ た ん で す よ ね ？
 き 込 み が あ っ た 。
 B B S を 表 示 し て み た 。 常 連 さ ん か ら の 書
 人 も 学 生 さ ん も 主 婦 の 方 も い た 。
 だ け で は な く 、 男 性 も 多 か っ た 。 働 い て い る
 の だ が 、 そ こ に ア ク セ ス し て く れ る 人 は 女 性
 オ ア シ ス に な る よ う な サ イ ト ー と 思 っ て い た

て い な か っ た 。 彼 を 信 じ き れ な い 気 持 ち も あ
れ は 心 地 よ い 感 覚 だ っ た 。
分 を 必 要 と し て く れ て い る と 思 っ て い た 。 そ
も 、 彼 を 思 っ て い た 自 分 の 気 持 ち を 。 彼 は 自
ら な か っ た が 、 今 の 江 奈 に は わ か る 。
あ の 時 は そ の 指 摘 が 正 し い の か ど う か わ か
持 ち に 執 着 し て い る か ら で は な い で す か ？
か ら と い う よ り も 、 彼 を 思 っ て い た 自 分 の 気
『 あ な た が 落 ち 込 ん で い る の は 、 彼 と 別 れ た
ス を 思 い 出 し た 。
書 き 込 み を し た 時 に ア ド バ イ ス さ れ た 長 文 レ
た 。 作 業 を し な が ら 、 ふ と 夏 に 失 恋 サ イ ト へ
し た 北 海 道 の 写 真 を パ ソ コ ン に 保 存 し は じ め
ッ グ の 中 か ら デ ジ カ メ を 出 し た 。 そ し て 撮 影
一 旦 、 イ ン タ ー ネ ッ ト の 接 続 を 切 っ て 、 バ
だ 。
ア ク セ ス し 、 B B S に 年 末 の 挨拶 を 書 き 込 ん

作業を終えて、パソコンを閉じた。窓を開
：。今度はもつと楽しい穏やかな恋愛をしよう：
江奈はため息をついた。
かっただ。程度のものだったなんて認めたくな
てしまいう程度のものだったなんて認めたくな
にしえていたものが、あんなにたやすく終わっ
彼と一緒に過ごしてきた時間が、自分が支え
たかないという悪あがきだったのだと思う。
り、彼を思っていた気が持ちを簡単には手放し
あの際の落ち込みの理由は指摘された通
んこになった。
意打ちをくらって、江奈のプライドはぺちや
て行ったのがあまりにも突然だったから、不
どこかでわかっていたはずなのに、彼が出
ないふりをしていた。
痛い目に遭うかも：
痛いの目に遭うかも：
てくれることを望んではいたけれど。いつか
った。彼の性格をわかっていただけから。変わっ

けて空を見上げると、満月よりも少し欠けた
月が見えた。
「新しい恋がしたいな」
しんとした月を見上げながら、江奈はぼつ
りと呟いた。
お風呂から出て部屋に行き、携帯電話を見
ると、裕弥からの着信履歴があった。
彩菜が折
り返しかけてみると、寝ぼけたような声の裕
弥がでた。
「ごめん、もう寝てた？」
「いや」
裕弥はこたえたけれど、実は彩菜の電話で
目を覚ましたところだった。
インターネット
カフェから帰る道すがら、なんとなく彩菜の
携帯に電話した。
呼び出し音を聞きながら、
「忙しい大晦日にでられるわけないか」なん
て淋しい気持ちになつて電話をきつた。
部屋に戻った裕弥はずっしり重たい疲労を

感じて、服を着たままベッドにもぐりこんだ。そして今の彩菜の電話で起こされるまで眠っていたのだ。時計を見ると十一時半をまわっていた。好きなサッカーチームの特番が既に始まっていることに気付いたが、自分がきちんと録画予約をしていて録画のランプがついているのを見てホッとした。ひよつとしたら今日は実家に泊まることになるかとも思い、出かける前に録画予約をしていたのだ。そんな今朝の心境を思い出すと、裕弥はまた気分が沈んだ。　「ねえ、裕弥」　「彩菜が明るく言う。」　「一緒に初詣行かない？」　「うん。近くのお正月だもん。一緒に行きたいな。」

「こんなな圧勝なのって珍しいよね」

「ホントだ」

入っていた。

テレビ画面は紅白歌合戦のエンディングに

「白組圧勝だよ」

つけた。

とこたえながら裕弥はリモコンでテレビを

「ううん、観てない」

「裕弥、テレビ観てる？ 紅白歌合戦」

「なに？」

「うん！ 嬉しいな。楽しみ！ あっ！」

「：：行こうか、初詣」

聞いているうちに心が和んできた。

気分になつていた裕弥だったが、彩菜の声を

「じゃ、行こうよ」

「ううん」

「あ、なにか他に予定入っちゃってる？」

口調になる。

返答に詰まった裕弥に、彩菜は不安そうな

「そう？ 毎年観てるわけじゃないからわか
らないけど」
「そうなの？ いつもは何を観てるの？」
「その時によって違うかな。なにも観ない時
もあるし」
裕弥はテレビを消して、部屋の窓を開け
た。そろそろ聞こえてくるはずだ。外は新し
い年を迎える神聖な空気に満ちているよう
に感じられた。裕弥はふと空を見上げる。
「裕弥？」
黙っている裕弥に彩菜が声をかけた。
「あ、ごめん、月が。今、窓開けて見上げた
ら月がきれいだったから」
「ホントに？」
彩菜は言っていて、部屋の窓を開けて空を見上
げた。
「月、見えないよ」
「俺の部屋の窓からはきれいに見えるよ」
「わたしの部屋からは見えない」。向きが悪
いかも」

た。今年、の終わりに最大の素敵なプレゼント
れない。でも彩菜には裕弥の言葉が嬉しかった
るの。「わ、わたしもね、裕弥といると元気になる
「俺、彩菜がいると頑張れそうだな」
胸が高鳴ってくるのを感じていた。彩菜は
緒に初詣に行けたらいいね」
「今回だけじゃなくて、これからずっと一
ね」
「こんなふうにずっと一緒に過ごせるといい
「なに？」
「彩菜」
たされた。
た。そしてとてもしあわせな素直な感情に満
自分にとってかけがえないものだと思え
弥はやさしい空気に包まれて、彩菜の存在が
彩菜の口調がくすぐったかった。ふっと裕

をもらったような気がした。
彩葉は目に涙をためながら、月が見えない
夜空を見上げた。目を瞑る。涙が頬に零れ落
ちた。そして、そつと空のどこかに在るその
響きに耳をすませた。

愛も
苦しみも
さびしさも
しあわせも
全部全部包み込んで

ごーん
：
：
、
と鐘の鳴る音が聞こえた。

了